

## ■ 中編

### ■ 学芸員の仕事 ■

#### 一 岐阜県美術館での学芸員の活動はどのようなものでしたか？

##### 平屋の建物

岐阜県美術館の準備室に採用される直前まで、垂井町の「あゆみの家」という障がい者施設の理事長をやっていた。この施設はアメリカから来た、ジョン・ポーマンという宣教師が当時、無認可で私的に運営していた。その辺りにいる、障がいを持った人たちは皆、家の2階の隅にやられていた。家の結婚だとか就職に影響するから、障害のある人たちを隠していた。そういう噂を聞くと、ポーマンさんはその家へ行って、その人を預かる。それを手伝っていた。車いすなどの人たちと、年に何度か、長良川の河原とかで1日、遊ぶとか。芸大を卒業してから36歳まで、女子短大で教えながら、「あゆみの家」でそういうことをしていた。

岐阜県美術館の準備室スタッフになった時、美術館建設の候補地が、岐阜市内に3箇所あった。加納と、長良の岐阜大学跡地と、宇佐の紡績工場跡地。結局、県庁に近い所で、1万坪あるからという理由で、宇佐に決まった。美術館準備室の最初の仕事は、そこにどのような建物を建てるか、という課題だった。

収蔵品がまだ、荒川豊蔵の《早春》という茶碗一個なのに。同じ時に三重県立美術館は陰里さん[註10]が準備を始めていて、長原孝太郎だけで200点入ったとか新聞に出ていた。私は「岐阜県美術館は開館時に、収蔵品が最低600点要ります」と知事に言っていた。それを何とかしなきゃいけないっていう時に、建物も考えなきゃいけなかった訳。

その時に、私は上松知事に「これからの美術館は、車椅子の人のことを考えたら、平屋でなければ駄目だ」と言った。その言葉ですぐ決まった。知事が「みんな分かったか。美術館は平屋で行くぞ」って言って。それで、車椅子の人は岐阜県美術館に、いつでも、障がい者用の通路からではなく、みんなと同じように入れるようになった。



2019年 岐阜県美術館外観

.....  
註10 陰里鉄郎(1931—2010)：神奈川県立近代美術館、東京国立博物館の学芸員などを経て、三重県立美術館の設立準備に関わり、1982年に同館の初代館長に就任。

##### 視覚障がい者の利用

美術館の設計が始まった時、「美術館の中には、点字ブロックは要らない」と主張した。点字ブロックがあると、歩いて気になるし、デザイン上もみっともないから。その代わりに、学芸員など、職員が視覚障がい者の人を案内することにしよう、と。

愛知県美・名古屋市美・三重県美・岐阜県美の館長会議で、岡山市立美術館が視覚障がい者の鑑賞会

をしたことを話した。すると、名古屋市美術館の館長が「うちで角田美奈子学芸員がそれを考えてる」と教えてくれた。それで名古屋市美に行ったら、角田さんが「1年に1回やっています」と。白い手袋して彫刻を触ったりする、と。ただし絵は入ってなかった。

岐阜県美術館でもやりたいと思い、準備を色々やっている中、館のみんなに提案した。すると、「なんで視覚障がい者が。美術館は関わりようがないじゃないか」という意見がほとんどだった。当時、全国的にもそうだった。しかし、なんか工夫しようと、岐阜市の愛盲館（現・視覚障害者生活情報センターぎふ）に相談したら、立体コピーでも協力できると言う。「じゃあ、絵画の立体コピーも出来るかもしれない」と思った。その後、名古屋YWCAが視覚障がい者と美術館に行く活動も知って、岡田学芸員（＝聞き手）に協力を求めた。彼はこの取り組みを一生懸命やってくれた。

ある時、名古屋市と岐阜市から3つの視覚障がい者団体が来た。団体と館職員をグループ分けして、私のグループには車椅子の盲人が入った。男性の50代で、介護の人も付いていた。一級品を触ってもらおうと、ロダンの白大理石の《エヴァ》を対象にした。私はその男性に、まず基本的なことを、耳からの情報で伝えた。「ロダンという人の作品で、《アダム》と《エヴァ》の内、《アダム》は静岡県立美術館にあり、岐阜県美術館は《エヴァ》なんです」と。そして、白い手袋をして、交互に作品を触ったら、その人が「これはアダムだ」と断言した。我々が目で見ると、エヴァと思うけれど、「いや、この肩と背中が男だ」と言った。

その直後、この経験を静岡県立美術館のロダン館の人に話したら、「その頃ロダンは男性をモデルにしていた」と。「これは男だ」と言い張る根拠まで、我々は見ていなかった。我々は、《エヴァ》のモデルが男性の体だったことまで、見通せなかった。美術関係者でない一般の人、目の見えない人によって、私は気づかされた。そういうことが、いくらでもあるかもしれない。館職員の朝礼で私は「学芸員という鎧で身を固めれば、その中だけで見てしまうものがある。気をつけましょう」と話した。

その後、岐阜県美術館で視覚障がい者同士のお見合いが開かれた。私はそれを単独で決めて、「なんでそんなことを。無責任に」と、また皆に怒られた。でも、アソシア（視覚障害者生活情報センターぎふ）の人たちが手伝って、視覚障がい者の人たちが岐阜県美術館に来て、屋外で会ったり、レストランで会ったり、多目的ホールの椅子に座ったりした。それは関係者が、視覚障がい者同士の結婚を大事に考えてのことだった。

他にも、ペットは施設に入れるのは禁止というルールがあるけれど、岐阜県美術館では盲導犬は入っていいことにした。それは、当時は珍しいことだった。岐阜県美術館の視覚障がい者利用のニュースは、全国的に広がったね。

## 美術館のあり方、館長として

### － 美術館のあり方として、どのようなことが大切だと考えますか？

コロナ禍で全国の美術館が閉館してしまった時、私は朝日新聞・岐阜新聞・中日新聞に依頼をした。こういう時こそメディアは、「美術館・博物館に行きましょう」と書いてくれないか、と。「ここは空気が綺麗だし、『蜜』はない」「その地域に住んでいる人たちの税金で運営しているのだから」と。常設展は空いている。そこに展示されているのは、地元に関係あるものが多い。そんな場所が全国に沢山ある。

中日新聞だけから返事があって、結構やり取りをした。新聞社も、国が決めたことに逆らえない。その上での提案として、私が書くと伝えた。そうしたら、ゴールデン・ウィークの頃、東京新聞と中日新聞に、同じ記事が出た。写真だけが違って、東京は国立近代美術館の写真、こちらでは岐阜県美術館の写真。「美術館が閉館している。こういう状態が全国で起きている」という報道を出してくれた。私は「美術館はパンデミックの時こそ無料にしてほしい」「企画展はやめてもいい。でも所蔵品展は、私が37年勤めて、「密」になるほど混んだことはない。家族で行ける」と主張した。

東京新聞の方は結構、反応があった。同じ頃、東京都知事の小池さんが「美術館・博物館は開きましよう」と言ってくれた。記事がきっかけかどうかは知らないけれど、タイミングとしては記事の直後だった。小池知事は「あそこは空気が綺麗だし、大体環境もいいし」と、記者会見で話した。

(岡田：似た話を古川さんから聞いた覚えがあります。阪神大震災の時に、芦屋市立美術博物館が被災者の避難所になった。それを古川さんが知って、「喜ばしいことだ」と言われたり、記事に書かれたりしましたね。)

書いた書いた。どこの地域にも美術館は出来ている。美術館連絡協議会だけでも170館はあるのかな。全国に博物館と博物館相当施設は6,000館ぐらいある。それらの館が今、建て直す時に来ている。「改修の時に、施設の条件に、地域の避難所になることを入れると良い」という提案を、美術館連絡協議会にもした。

最初に記事に書いたのは、阪神淡路大震災の時(1995年)。その頃、岐阜県美術館には『あゆ』という機関誌[註11]があった。両開きで2ページ分、学芸員が何でも好きなテーマで、長く書ける場所があった。確か「災害時に学芸員は役に立つか否や」というタイトルで、「美術館が災害時の避難所」と書いた。

東日本大震災の時(2013年)には、宮城県美術館が避難所として開いたと聞いた。60何人が避難して来たそうだ。だから、美術館も防災施設に入れてもいいと思う。美術館には美術作品が在るから、みんな防犯のことを心配する。でも、誰も作品を持っていくとかしないよ。避難施設化をやりだしている所はあるんじゃないか。美術館は美術の館だけでなく、私たち人間の社会的な営みの場でもある。美術館が、雨の日も風の日も災害の日も、役に立たないと意味がない。そういういうことを、私は職員からも学んだ。

.....

註11 美術館友の会の会報。A3二つ折り一枚。

## 一 館長になって、何を考えるようになりましたか？

岐阜県美術館の館長になると、多い時は1週間に1回、クレーマーが来た。「館長を呼べ」と言う。また、教育委員会に呼び出されたり、「美術館にこういう投書があっただろう」と言われたりした。それで、クレーマーに直面させられた。そういう人たちは、偉い人を困らせたいという、妙な意欲を持っている。

その中で気になったのが、「展示室でメモをとる際、ボールペンやシャープペンシルは禁止」というルール。私は「このルールをやめよう」と提案した。万年筆はインクが飛ぶから、止めた方がいいけれども、今使っている人はほとんどいない。ボールペンは、インクが漏れることは、今はまずない。シャープペンシルは、尖がっているから使ってはいけない、というのもおかしい。美術の理解に意欲のある

人は、メモを書きたくなる。ある学芸員は「それは国が決めたことだから、いいとは言えません」と言った。しかし、私は主張を続けた。監視員に注意された人は、心理的にダメージを受けて、その美術館にもう来ないのだから。

子供が泣いた時、「子供を泣かせないでください」という注意も意味ない。監視員たちが「泣かせないでください」と言うけれど、親の気持ちを分かってない。「もう1回入れますから、後でどうぞ」の一言が言えない。子供が走ると、「走らせないでください」と言うだけ。

月に一回、監視員を集めた朝礼があった。そこで私が言っていたのは、「皆さんの仕事で1番大事なのは、『美術館に来て良かった。美術館は面白かった。楽しかった』という思いを持って、帰ってもらうようにすること…だから、注意は絶対良くないよ。注意された人は、すごくあなたを嫌うし、美術館を嫌いになっちゃう。さらには、美術を嫌いになってしまう。そんなことをしてはいけない…そういうことを、いつも、どんな場合も、考えておいてほしい。何か注意しようと思った時は、その人が『今日、美術館に来てよかった』と思えるかどうかを、まず考えてほしい」と伝えた。

けれども、「こうしましょう、ああしましょう」というルールが作られる。「ガムを噛んだら、注意しましょう」「シャープペンシル、ボールペンで書いた人には、鉛筆を持って行きましょう」。私はこの対応も必要ないと思う。「鉛筆に替えてください」と頼んだら、言われた人は納得いかないよ。「どこが違うの」と思うはず。「傘を持って中に入れません」というルールにも問題がある。折りたたみの傘をバックに入れて、柄が出ているだけで、ダメだと言う。一番多いのは、これだったかもしれない。

私は、美術館の学芸員には、「美術館に来た人が一平らな言葉で言えば一幸せになって帰れるようにすることが、仕事だよ」と言いたい。ワクワクした人が来て、絵を見て、自分の今までの人生の甘さを反省して、深刻になって帰る、といったことも含めて。「問題に気付く場や、楽しく有意義な場になること。来館者の経験が豊かであっても未熟であっても、それが大事だ」ということを、繰り返し伝える必要がある。

今の時代、全国的に、学芸員が作品保存に関して、かなり神経質になったと思う。それで館内がシーンとなってしまった。確かに、静けさが良いという人もいるし、それも大切。しかし同時に、美術館は賑いの場でもある。笑ったから注意された、という人もいる。「大きい声で笑ってないですよ。注意されて、私はもう美術館に行けません」と言われた。「周りの人に迷惑な話し声は、控えてください」という注意は、ありかもしれない。だけど、話し声は、注意することだろうか。仲間同士で絵を見て、語り合うことはあるでしょう。

館長というのは、そういう類いの文句を一手に引き受ける職でもある。県職員とか市職員で、美術館・博物館の経験ない人が、人事異動で館長職に就く場合、その面で問題がある。自分に責任が来ないような場にしていくから。

私は、美術館・博物館は、良いと悪いが紙一重であるところ面白いと思う。感動して涙する人もいれば、パーンと手を叩く人もいるかもしれない。それがいいんだと思う。偉い人が視察に来ると、最初によく言うのは「私は芸術に疎くてね」。そこで私はあえて「どの絵が1番気に入ったか、お帰りの際にお聞きします」と言う。偉い人は、あの部屋のあの絵が良かった、とか感想を言う。私は「それなら良かった」と思う。そういう機会を与えられる学芸員でないといけない。心が固まっている人が、壊されていく体験をするようにするのも、学芸員の役割だと思う。

「curator」に含まれる「cure」という語には、食べ物が腐らないようにするとか、年配の人の後見人になるとか、「助ける」という意味がある。頭が固まった人がいたら、それを柔らかくして、助けてあげることもあるはず。つまり、ハッと気づくようなことをしてあげて、「腐らないようにしてあげる」。学芸員のそういう役割について、昔、書いたことがある。

■ 後編へ続く